

事業名 親子が木と共生していく木育事業



1 実施団体

若者のやる気と地域課題をマッチングして事業化するまちづくり団体

国立おうめ楽校（うめ校）<http://umekou.net/>

※うめ校の中でも、子どもたちに環境教育の学びの場を提供するプロジェクト「おうめこどもエコクラブ」<http://umekou.net/Ecoclub>

を中心に、今回の市民提案協働事業を実施。

2 担当課

農林課、子ども家庭支援課

3 実施時期

2015年6月8日（水）～2016年3月31日（日）

4 参加者

講座名	人数
＜夏休み＞子どもが青梅の自然や木と向き合う講座を2回実施 ・ 幼児（3歳～未就学児）対象 「山の現実をみよう！木で工作し、暮らしにいかそう！ツアー」	16名
・ 小学生対象 「林業家さんの仕事見学ツアー＆まちのベンチづくり」	13名
＜秋＞妊婦さん対象 「産まれてくる我が子が触れるはじめてのおもちゃを木でつくる」	19名
＜冬＞木だけじゃない身近な自然と触れ合う講座を2回実施	

・ 幼児～小学生対象「青梅の自然を感じて“竹筒の正月飾り”」	15名
・ 小学生～大人対象「木育での“こけ玉”教室開催！！」	28名
＜春＞親子を対象に木のおもちゃを囲みながら、おもちゃ談議 次年度ファーストタイププロジェクトに向けてママから意見を聞く 「楽しみながら青梅の木育について考えよう！」	19組 28名

5 実施場所

御岳交流センター、中島林業所有の山・成木の家、市役所、JA西東京かすみ直売センター、風の子太陽の子広場管理棟集会室

6 事業の目的

青梅の森林を守るためには、利用促進が必要ですが、次世代を担う若い親と子どもたちの周りでは、利便性や経済効率の追求によって、木や緑に囲まれたゆとりある空間や社会性を育む場に触れる機会が失われようとしています。

子どもの頃から木を身近に使っていくことは、人と森や木との関わりの大切さを考えられる豊かな心を育てます。このように地域社会全体が協働して取組みを進めていくことで、人と人とのつながりや地域経済の活性化を図れる可能性を持っています。親子を中心とした講座を実施しながら今後の展開を探っていきます。

7 役割分担

- ・ 団体の役割
 - ・ 事業の運営
 - ・ 団体が運営している「おうめこどもエコクラブ」との協力した講座の展開
 - ・ 次年度事業展開に向けた会の運営
- ・ 担当課の役割
 - ・ 会場の確保
 - ・ 事業の広報および周知を行う
 - ・ 講座の運営支援
 - ・ 次年度以降の協力体制の検討

8 事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

自団体は、若者のやる気と地域課題をマッチングさせプロジェクト化をはかり、いろいろなプロジェクトを運営しております。その中に同協働事業で、事業の初動を応援していただきました「おうめこどもエコクラブ」プロジェクトがあります。このプロジェクトは現在会員60名の組織になり、今年度5年目を迎えます。エコクラブには特に環境問題に興味・関心のあるお子さんが多く集まります。この輪は人づてに広がっていますが、会員を中心に青梅市の環境教育の発信ができると感じています。よって、今回木育を広げていく上でも重要な役割を果たすと確信しております。

また、プロジェクト担当の松田は環境教育指導者として環境教育の授業コーディネーターを仕事にしております。そのスキルを今回のプロジェクトでも活かせると確信しております。起業家・若者・親子世代のネットワークのある自団体だからこそ、青梅市の環境教育しいては木育の普及に貢献できると思い応募しました。

結果、講座の実施とニーズの把握、木育の周知と今後の展望を検討することができました。

9 目標達成

- ・事業の目標：木の道具を使うことや生活空間に木を増やすこと、木や森に積極的に関わるなど暮らしに根付いた事業や、特に子どもに対して、自然の大切さと青梅の大切さと青梅市への愛着を育むための事業を実施します。
- ・目標の達成具合：

達成

10 事業の実施内容

8月講座①：御岳ガイドで青梅の自然の良さを知る。森の手入れの仕方も見る。青梅の木でおもちゃを作り、持ち帰ることで、愛着を持ってもらう。



12月：自分たちの生活に自然を感じる時間を入れられるように、行事に合わせた「正月飾り作り」講座を実施。梅結びをして、青梅の梅の復興と日本の伝統を感じました。



2月：身近な植物「苔」——知っているようで何者か知らない人が多い一方、なぜか苔玉はすごく人気！苔について知り、自然を好きに！また苔玉を置く台を青梅の木に。青梅の木についても併せて知ってもらう機会に。



3月：最後のまとめとして、より青梅の木育を育てていくためにはどのようなことを進めていくのがいいかの話し合いを地域のママたちを集めて行いました。



<講師陣>

- ・土屋 一昭（森の演出家・テレビ出演多数）
<http://www.tokynomountain.jp/birdtime/tsuchiya.html>
- ・中島 大輔（青梅の若手林業家・活動は多岐）
- ・(有)榎戸園（青梅の造園業・講師も多数）
- ・mokumukuworks(おもちゃを制作している青梅のママが活躍する会社)

・おもちゃインストラクター 秋元和美

11 実施団体と担当課の事業評価

4 はい 3 どちらかといえば「はい」 2 どちらかといえば「いいえ」 1 いいえ

●農林課

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	3	3
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	4	4
(3)協働の役割分担は適切だった	4	4
(4)協働相手は適切だった	4	4
(5)対等な立場での協力関係を築けた	4	4
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	4
(7)事業実施は円滑になされた	3	4
(8)設定した目標が達成された	4	4
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	4	4
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	4	4

12 まとめ（今後の課題や改善点など）

今回、講座の対象を変えて、どのの方々により伝えていくことが「木育」の学びにつながるのか？また、木に特化するだけでなく、どのように伝えていけば青梅の自然に目を向けてもらい、後世に伝えていくことができるかも併せて検証しました。

結果、

- ・妊婦やママの講座時に、祖母の方々から、孫のためにおもちゃをつくりたいので参加をしてよいか
- ・ママは自然に興味があるが、小さい子を連れて自然の中に頻度高くいくのはハードルが高いこと
- ・幼児・小学生は親に興味と子どもの興味が合致し、休日のタイミングがあれば参加できること
- ・苔玉の参加者は今までの講座の中で一番多く、より身近な自然から入り、青梅の自然に目を向けることが視点としてはとっつきやすいのではないかと

など、様々なことが分かりました。

また、3月の座談会では青梅で生まれた子向けにどんなおもちゃがもらえると嬉しいかという意見では、

- ・自分たちでひと手間加えて完成できるおもちゃ
- ・市役所に焼きごてを置いてもらい、そこで子どもの名前をいれることができる
- ・もちろん青梅の木であることが1番重要
- ・青梅の木や自然、木育のことを子どもたちに伝えてあげられる本が一緒にあるといい
- ・食育も併せて、木の食器の方がいい
- ・配布ではなく、講座で実施してほしい
- ・イベントに行くのはハードルが高いので、もらえてすぐ遊べるものがない など

こちらも様々な意見を頂戴しました。

今回この助成金をいただいた経緯としては、

当団体で環境政策課さんと協働で実施している「おうめこどもエコクラブ」にあります。子どもたちに青梅の自然を伝える講座を数多く実施してきましたが、単発の講座が多く、青梅の自然の良さを一時的には伝えることはできますが、もっとより深く学びたいという子に対してどのようにしていくのがいいかといったことがありました。そして、青梅の自然を考えたときに「木」に着目。林業衰退や梅の木のウィルスなど、身近で様々な問題が起きていることを子どもたちに知ってもらい、青梅の自然を大事していく行動を子どものときから親子で考えてもらえる機会をもっとつくりたいという思いから今回の協働事業につながりました。今回事業を実施して、子どもたちが学ぶことの大切さに加えて、実際に木を使っていくことの重要さを改めて感じました。日本各地に竹林の放置が問題で、土砂崩れが起きやすくなっている問題同様に、木でも同じことがいえます。昔は竹も竹かごにしたりと使う機会がありましたが、木も同様に現代の暮らしには密着しているとはいえません。

より木を使っていくためには、「循環」させていくことが重要です。

木を切る人、製材する人、加工する人、使う人、そしてこれが大事だと思える人を育てることを今後も継続的に実施していくことが重要だと思いま

す。

例えば、生まれた子のためにおもちゃを配布しようと思うと、木をそんなに使用しないですが、青梅市では約900人の子どもが産まれていることから加工する人がすごく重要になります。そこまで広い視野を持ち、木育をとらえ、今の現実と向き合いながら、この事業を進めていくことが青梅の木の循環につながり、人の想いの循環につながると思います。

この輪が続くように、当団体としても少しでも活動できればと思います。今回はおうめこどもエコクラブのメンバーの学びにもつながり、併せて「木育」の第一歩を踏む機会を頂戴し、本当にありがとうございました。

最後になりますが、

農林課の皆さんには全体の支援を頂戴し感謝しております。また、子ども家庭支援課さんには農林課を通して子どもたちへの広報支援を頂戴し本当にありがとうございました。

13 その他

今後の活動については、今回協働事業で同じ「木育」をテーマに事業を実施されていたNPO法人青梅こども未来さん含め、有志の方々とともに、「森育おうめ」として活動を継続させていこうということになりました。どのようにしていくことが市民を巻き込みながら、青梅の木の未来を考えながら楽しく行動していくことができるのか、みんなで考えていきたいとします。